

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2013

課題番号：23242025

研究課題名(和文)生成生物言語学に基づくヒトの言語能力の設計・発達・進化の統合的研究

研究課題名(英文) An Integrated Generative Biolinguistic Approach to the Design, Development and Evolution of the Human Language Faculty

研究代表者

藤田 耕司 (FUJITA, Koji)

京都大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00173427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 39,600,000円、(間接経費) 11,880,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、生成文法の最新の展開を理論的基盤とした人間言語の生物言語学的研究を推進し、言語の設計・発達・進化についての新たな知見を提供した。

設計に関しては、基本統語演算操作MergeとSearchの形式的特性およびその神経基盤を明らかにした。発達に関しては、第一・第二言語獲得におけるパラメータ設定と脳機能の関係を発見した。またブローカ野内BA44とBA45のMergeに関する選択的機能を明らかにした。進化に関しては、生物哲学的考察と考古学的証拠に基づき統語の運動制御起源説と言語の早期発現説を提起した。また格や一致といった統語現象の言語の外在化に影響する文化進化的特性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This research project has conducted biolinguistic studies of human language on the basis of the latest development of generative grammar and provided new insights into the Design, Development and Evolution of language.

(I) Design: Formal properties of the fundamental syntactic computational operations Merge and Search, together with their neural substrates, have been identified. (II) Development: Correlations between parameter setting in first/second language acquisition and brain functions have been discovered. Selective functions of BA44/45 in Broca's area with respect to Merge have been elucidated. (III) Evolution: On the basis of philosophical considerations of biology and archaeological evidence, a theory of the motor control origin of syntax and a theory of earlier emergence of human language have been proposed. The cultural evolutionary nature of certain syntactic phenomena including Case and agreement has been clarified in relation to their effects on externalization.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：併合 回帰性 構造依存性 ブローカ野 内心性 対称性 進化的妥当性 生物進化・文化進化

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年のミニマリスト・プログラムの発展によって人間の言語能力やその生物学的基盤である普遍文法の理解が飛躍的に進み、生成文法は当初からの目的である「生物学的能力としての言語の研究を通じた人間の理解」「人間生物学」の実現に大きく近づいた。これを背景にして、海外では生物言語学の研究も急速な展開を見せている。しかしながら、日本国内ではこの部分における遅れが目立ち、生物言語学に本格的に取り組む研究者や研究組織はほぼ皆無であった。本研究はこのような状況を早急に改善する必要があるという認識に立ち、わが国における初の生物言語学プロジェクトとして、この分野の先導的な役割を果たすべく着想されたものである。

(2) 生物言語学は学際性の高い研究領域であり、理論言語学や生成文法のみがこれを構成しているわけでは当然ない。しかしその中において、生成文法は、言語現象の精緻な分析と言語能力の優れたモデル化を通じて、他分野の研究者に対しても生物言語学の理論的基盤を提供し、説明の対象を明示化するという重要な役割を担っている。本研究もこの理由から、理論的枠組みを生成文法に統一し、この立場からの生物言語学研究（生成生物言語学）を推進することで、生成文法と生物言語学の双方に新たな知見と発展をもたらすべく計画された。

## 2. 研究の目的

(1) 言語を人類固有の生物学的形質であると理解するならば、言語に対しても他の生物学的形質の場合と同じ問題設定が可能かつ必要になる。すなわち、(A) 設計、(B) 発達、(C) 進化である。設計は、言語がどのような仕組みを備えた能力であり、どのように働くのかという問題であり、発達はこの特定の能力が各個人においてどのように発生するのか（個体発生、言語獲得）の問題、進化はこの能力が最初、ヒト種においてどのように発生したのか、より正確には言語を持つ新しい生物種がどのようにして生まれたのか（生物進化）と、その後の歴史的経緯の中でこの能力がどのように変化・複雑化・多様化してきたか（文化進化）の問題である（起源と進化、系統発生）。

(2) これまでの生成文法研究は、主に設計と発達の問題を中心にして展開され、重要な成果を多数蓄積してきたが、これに新たに進化の問題を加え、設計・発達と合わせて考究することによって、生成文法と生物言語学あるいは進化言語学の双方にさらなる進展をもたらすことが期待できる。本研究はこの基本的な指針の下、言語の設計・発達・進化の研究を生成生物言語学に基づいて同時並行的・統合的に推進することを主たる目的とした。

言語の起源・進化の問題は生成文法を含む理論言語学においては長きに渡って等閑視されてきたテーマであるが、現在では、多数の関連領域による学際的な研究が盛んになっており、その中で生成文法はその理論的基盤を提供するものとして大きな役割を果たすようになった。これを受け、本研究でも進化を主軸とした人間言語の学際的研究を行い、生成生物言語学に基づく人間の心・脳、思考、認知の根本的理解に迫ることとした。

(3) さらに、本研究はわが国において立ち遅れが目立つ生物言語学を対象とするわが国初の組織的な研究プロジェクトであり、生物言語学の今後の発展を見据えた研究拠点<日本生物言語学プロジェクト>の形成という意義も併せ持つ。このプロジェクトを通じて、海外の生物言語学研究組織との連携を進め、わが国の生成文法および生物言語学の進展に貢献することも、同じく重要な目的であった。

## 3. 研究の方法

(1) 上記の目標を確実にかつ効率的に達成するため、本研究内に、設計・発達・進化のそれぞれを専門的に扱う3つの研究チームを編成した。各チームにはチームリーダーを置き、チームリーダーの指揮の下で、チーム内の共同研究と個人研究を推進し、かつ研究代表者とチームリーダーの合同指揮の下で、本研究全体の共同研究を推進することとした。段階的な年次計画を立て、初年度である23年度は個人研究を中心に行い、24年度はチーム内共同研究を、そして最終年度である25年度は全体的な共同研究を、それぞれ行うこととした。

(2) 言語は単一の機能ではなく、構造・意味・音声のそれぞれに関わる少なくとも3つの自律的モジュールからなる複合的機能である。ミニマリスト・プログラムの知見では、これらのうち、構造に関わる統語演算システムのみが真に人間固有の部分であり、またこの統語演算は集合を形成する回帰的な最小演算操作 Merge（併合）のみをその成員とするとされており、これが進化的にも発達のにも注目すべき仮説となっている。これに加え、語彙知識、特に統語演算に関与する形式素性、さらに統語演算と概念・意図システムならびに感覚・運動システムとのインターフェイスも人間言語の大きな特徴である。そこで本研究でも、主にこれらの3点が言語設計の核心に迫る鍵であると考え、設計・発達・進化の観点からその実体を明らかにして言語や認知の本質解明に迫っていくこととした。

(3) 具体的には、設計研究チームは最新ミニマリスト統語論をさらに洗練させながら、多様な統語現象の理論的分析を通じて回帰的 Merge や素性一致のメカニズム、インターフ

エイスの成立様式に関する明示的モデルを提案することとした。発達研究チームは、幼児の初期言語発達に関する先端的研究と、脳神経科学の最新テクノロジーを援用した独自の調査・実験に基づいて、これらのメカニズムが初期文法においてどのように発現し、語彙知識と統語知識がどう相関するかを解明することとした。また進化研究チームは、これらの成果を最大限に活用しながら、ヒト進化におけるプロト言語から完全な人間言語への推移様態、特に回帰的統語演算能力の創発の経緯とその前駆体となる一般認知能力、さらに生物進化と文化進化の相関について進化生物学や進化言語学の最新の知見も取り入れながら明らかにすることとした。

これらの成果をまとめ上げて、言語の設計・発達・進化に関する総合的知見を構築することとした。

#### 4. 研究成果

(1) 23年度は各研究チーム内における個人研究を中心に活動を展開し、次のような成果をあげることができた。

① 設計研究チームでは、演算操作 Merge の諸特性を、内心性、投射、合成性、自己埋め込み等との関連において精密に考察し、(i)述語一項構造、 $\theta$ 構造、選択等の深層構造特性と外的併合、(ii)演算子構造、談話構造等の表層構造特性と内的併合、それぞれの緊密な関係を一般化して示した。これを説明するため、素性分布の「対称性」の概念に基づいて、「言語計算は統辞体の対称性を目指して駆動される」という仮説を提案した。

② 発達研究チーム内では、まず母語獲得に関して、CHILDES コーパスを用いて主語は最初期から動詞句内に基底生成されることを示した。第二言語獲得においても構造依存性が機能していることを、脳科学的証拠に基づいて示した。脳機能イメージングに基づき、ブローカ野のうち弁蓋部(BA44)が領域横断的な階層構造の処理を司る一方、三角部(BA45)が言語に特定の内心構造を伴う統語構造の処理を行う部位であることを指摘した。さらに数量詞の Wh 依存関係の処理に対する「干渉効果」を明らかにして、Wh 句と数量詞が部分的に類似する形で作業記憶中に記録されていることを示唆した。

③ 進化研究チーム内では、言語の生物学および文化的進化について研究を進めるとともに、生物言語学・進化言語学の科学哲学的側面や方法論上の特性についても考察を加えた。まず認知考古学的証拠に基づき、石器作製等に見られる行動文法の併合の前駆体としての位置づけを強固にし、UG の出現年代を従来よりも早い 13~15 万年前とする仮説を提示した。また英語の二重目的語構文の発達に注目して、その進化メカニズムを論

じた。方法論的考察としては、反証主義と妥当性の基準が言語進化研究にとって共に有効であることを示し、これらを勘案した比較研究の重要性を明らかにした。

(2) 24年度は各研究チーム単位での研究を推進し、次のような成果をあげることができた。

① 設計研究チームでは、Merge に基づく統語演算の本質を追究し、Merge と Label との関係、また Merge とは異なる操作である Search を Merge+言語固有でない操作  $\alpha$  として再分析する可能性について検討した。同時に、これらの演算操作の神経科学的基盤を fMRI を用いた実験によって調べ、Merge は直接的かつ選択的に左第 3 前頭回(弁蓋部および三角部)の活動を引き起こし、左縁上回の活動は Merge と Search の複合によって変化することを明らかにした。

② 発達研究チームでは、日本語のかき混ぜ現象に関する発達研究から、かき混ぜに関わるパラメータの必要性を明らかにした。また第二言語獲得に際してパラメータ設定が他者との相互作用において脳機能にどう影響するかについても研究を進めた。また前年度の、ブローカ野のうち弁蓋部 (BA 44)が領域横断的な階層構造の処理を司る一方、三角部 (BA45)が言語に特定の内心構造を伴う統語構造の処理を行う部位であるとする研究成果にさらに検証を加えた。

③ 進化研究チームでは、「統語演算能力の運動制御起源説」を人類考古学的考察によりさらに裏付けるとともに、「言語早期発現説」について考古学的証拠と遺伝子理論の整合性を考慮しながら検討した。また、言語の外在化を言語の小進化と捉え、言語の通時的変化と多様性をその結果と位置付けて、広い意味での統語現象(格や数・人称の一致、移動現象等)も言語の外在化に含まれると考え、内在化(思考言語)の形成との対比において研究を進めた。さらに MP の生物哲学的側面の特性と問題的を、動物行動学との比較に基づいて明らかにし、より整合性のある言語進化研究の方法論を検討した。

(3) 最終年度にあたる 25 年度も、前年度に引き続き、各チーム内およびプロジェクト全体の共同研究を推進し、統語演算系を中心とする言語能力の根幹について、その設計・発達・進化を多角的に検討した。

① 設計研究チームは、言語の基本演算の詳細な研究を行い、最も基本的な演算である Merge の他に、諸々の演算を統合する Search (探索) とその基本特性を同定した。また、言語とは独立の一般認知機構からこの演算を捉える可能性と、併合演算が拡張されたも

のとして特徴付ける可能性の両方を探究した。さらに、終端記号連鎖の背後にある階層構造の構築に関わる演算自体の脳科学的基盤を探る実験デザインを考案して、その実施に着手した。

② 発達研究チームは、言語の構造依存性が、観察し得る最初期から幼児の言語知識に見られることを、自然発話コーパス及び心理実験を用いて明らかにした。また、時間軸を考慮した言語処理研究を行い、類似の言語素性が複数存在すると、言語処理を行う際に短期記憶の負荷が増大することを明らかにした。さらに、言語獲得のパラメータ設定において、社会性が重要な役割を果たすことを脳科学から明らかにした。

③ 進化研究チームは、人間言語の創発に関する併合唯一説を、その起源とインターフェイス・語彙形成に関する仮説と共にさらに推し進め、その創発時期についても、最近の考古学、遺伝学等を含む幅広い学際的研究に基づいて早期発現仮説を練り上げた。一方、文化進化の視点からの動的モデルとして、思考言語と伝達言語という2つのレベルを想定し、言語の通時的進化研究の可能性を追求した。また、間投詞の生物言語学的視点からの語用論的分析により、併合の形式的性質や言語機能の因果的メカニズム等についての含意が得られることを示した。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 39 件)

- ① 藤田耕司. 2014. 生成文法と複雑系言語進化. 計測と制御 9. 査読有. 印刷中.
- ② Takaomi Kato, Masakazu Kuno, Hiroki Narita, Mihoko Zushi, and Naoki Fukui. 2014. Generalized Search and Cyclic Derivation by Phase: A Preliminary Study. *Sophia Linguistica* 61: 203-222. 査読有.
- ③ 成田広樹・飯島和樹・酒井邦嘉. 2014. 人間言語の基礎は複雑なのか? *BRAIN and NERVE*, 66(3): 276-279. 査読有.
- ④ 遊佐典昭. 2014. \* $\alpha\alpha$ . 英文学会誌 42: 45-64. 査読無.
- ⑤ Koji Fujita. 2013. A Merge-Only Theory of Human Language Evolution: How Plausible Is It? *19<sup>th</sup> International Congress of Linguists Abstracts Booklet* 19: 232. 査読有.
- ⑥ Shinri Ohta, Naoki Fukui and Kuniyoshi L. Sakai. 2013. Computational Principles of Syntax in the Regions Specialized for Language: Integrating Theoretical Linguistics and Functional Imaging. *Frontiers in Behavioral Neuroscience* 7: 1-13. 査読有.  
DOI: 10.3389/fnbeh.2013.00204
- ⑦ Masakazu Kuno. 2013. Toward Localizing

Agree and Internal Merge. *Proceedings of the 15<sup>th</sup> Seoul International Conference on Generative Grammar* 15: 227-232. 査読有.

- ⑧ Hiroki Narita, Takaomi Kato, and Mihoko Zushi. 2013. A Tangled Web of Biolinguistic Questions: Review of Anna Maria Di Sciullo and Cedric Boeckx, eds. (2011) *The Biolinguistic Enterprise: New Perspectives on the Evolution and Nature of the Human Language Faculty*, Oxford University Press. *English Linguistics* 30(2): 780-791. 査読有.
- ⑨ Bridget Samuels and Hiroki Narita. 2013. Phasing Out Projection: Considerations from the Syntax-Phonology Interface. *Linguistic Analysis* 38(3-4): 357-391. 査読有.
- ⑩ Hajime Ono and Yu Ikemoto. 2013. Binding and dependency length in gapless relative clauses. 信学技報 (電子情報通信学会技術研究報告 TL2013) 113:87-92. 査読無.
- ⑪ Masayuki Ike-uchi. 2013. On the Irrelevance of E-languages to the Question of Language Evolution. *19<sup>th</sup> International Congress of Linguists Abstracts Booklet* 19: 319. 査読有.
- ⑫ 保坂道雄. 2013. 格と外在化. 日本英文学会第 85 回大会 *Proceedings* 85: 97-98. 査読無.
- ⑬ Koji Fujita. 2013. Review of Anna Maria Di Sciullo and Cedric Boeckx, eds. (2011) *The Biolinguistic Enterprise: New Perspectives on the Evolution and Nature of the Human Language Faculty*, Oxford University Press. *Studies in English Literature* English Number 54: 175-184. 査読有.
- ⑭ Shinri Ohta, Naoki Fukui and Kuniyoshi L. Sakai. 2013. Syntactic Computation in the Human Brain: The Degree of Merger as a Key Factor. *PLoS ONE* 8(2): e56230. 査読有. doi:10.1371/journal.pone.0056230
- ⑮ 遊佐典昭. 2012. 言語の脳科学: 感受性期以降の統語発達を中心に. *KLS 32: Proceedings of the Thirty-Sixth Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, 323-333. 査読無.
- ⑯ Koji Sugisaki. 2012. Review of R. K. Larson et al. eds. 2010. *The Evolution of Human Language: Biolinguistic Perspectives*. Cambridge University Press. *English Linguistics* 29: 579-586. 査読有.

[学会発表] (計 98 件)

- ① Koji Fujita. Four Wrong Ideas in Evolutionary Linguistics. The 10<sup>th</sup> International Conference on the Evolution of Language (EVOLANG X). 2014.4.10. Vienna University, Austria.
- ② Shinri Ohta, Masatomi Iizawa, Kazuki Iijima, Tomoya Nakai, Naoki Fukui, Mihoko Zushi, Hiroki Narita and Kuniyoshi L. Sakai. An

- On-going Research: The Experimental Design. CREST ワークショップ. 2014.3.7. 東京大学.
- ③ Koji Fujita. The Biolinguistic Enterprise: Agenda, Goals and Methods. Seminars by Prof. Koji Fujita. 2014.2.19. National University of Singapore. 招待講演.
- ④ 杉崎 敏司. 幼児英語における Why not? とその理論的含意. 日本英語学会第 31 回大会. 2013.11.10. 福岡大学.
- ⑤ Miki Obata and Mina Sugimura. Phi-Agreement in Japanese: On the Person Restriction of Case-valuation. Western Conference on Linguistics. 2013.11.8. Arizona State University, USA.
- ⑥ Hajime Ono and Yu Ikemoto. Backward Dependency Formation in Japanese Gapless Relative Clauses. Architectures and Mechanisms for Language Processing (AMLaP). 2013.9.2. Aix-Marseille Universite, Marseille, France.
- ⑦ 成田 広樹. 心身二元論を超えて: デカルト・ニュートン・チョムスキー. 第 87 回かがみやま言語科学コロキウム. 2013.8.22. 広島大学. 招待講演.
- ⑧ Noriaki Yusa, Masatoshi Koizumi and Jungho Kim. Social Interaction Affects Neural Measures of Syntactic Processing: Evidence from fMRI. 19<sup>th</sup> International Congress of Linguists. 2013.7.26. Université de Genève, Switzerland.
- ⑨ Koji Fujita. A Merge-Only Theory of Human Language Evolution: How Plausible Is It? 19<sup>th</sup> International Congress of Linguists. 2013.7.25. Université de Genève, Switzerland.
- ⑩ Masayuki Ike-uchi. On the Irrelevance of E-languages to the Question of Language Evolution. 19<sup>th</sup> International Congress of Linguists. 2013.7.25. Université de Genève, Switzerland.
- ⑪ 保坂道雄. 格と外在化. 日本英文学会第 85 回大会シンポジウム「格と統語変化」. 2013.5.26. 東北大学.
- ⑫ Noriaki Yusa. Imaging Language Processing in the Brain. The English Society of Japan 6th International Spring Forum. 2013.4.27. 東京大学. 招待講演.
- ⑬ Koji Fujita. In Defense of the Merge-Only Hypothesis. GLOW 36 Biolinguistics Workshop. 2013.4.2. Lund University, Sweden.
- ⑭ 藤田 耕司. 人間の言語能力と知性の起源に迫る. 「京の府民大学」対象講座 京都大学公開講座. 2013.3.17. 京都大学. 招待講演.
- ⑮ Miki Obata, Marlyse Baptista and Samuel Epstein. Parameters as Third Factor Timing Optionality. The 87<sup>th</sup> Annual Meeting of the Linguistic Society of America. 2013.1.5. Marriot Copley Place, Boston, USA.
- ⑯ Masakazu Kuno, Takaomi Kato, Hiroki Narita, Mihoko Zushi and Naoki Fukui. Merge and Search. 日本英語学会 30 周年記念大会特別ワークショップ “Basic Operations of Syntax.” 2012.11.11. 慶應義塾大学. 招待講演.
- ⑰ Masanobu Ueda. On the nature of the naturalistic approach in biolinguistics. 日本英語学会 30 周年記念大会特別ワークショップ “Current and Future Issues in Biolinguistics.” 2012.11.11. 慶應義塾大学. 招待講演.
- ⑱ 福井直樹. 生成文法と言語の多様性. 日本エドワード・サピア協会第 27 回研究発表会. 2012.10.27. 上智大学. 招待講演.
- ⑲ Koji Fujita. The Hands that Rocked the Cradle of Language. ICREA International Symposium on Biolinguistics. 2012.10.3. University of Barcelona, Spain. 招待講演.
- ⑳ 辻子美保子. 併合に基づく日本語の格付与について. 大塚英語教育研究会 2012 年度第 4 回定例会. 2012.9.8. 筑波大学東京キャンパス文京校舎. 招待講演.
- [図書] (計 31 件)
- ① 藤田 耕司・福井直樹・遊佐典昭・池内正幸(編)、藤田 耕司・福井直樹・辻子美保子・久野正和・加藤孝臣・成田 広樹・遊佐典昭・杉崎 敏司・小野 創・小畑美貴・池内正幸・上田雅信・保坂道雄・Cedric Boeckx 他(著)2014.『言語の設計・発達・進化: 生物言語学探究』開拓社. 印刷中.
- ② Koji Fujita. 2014. T. Roeper and M. Speas eds. *Recursion: Complexity in Cognition*. Springer. 印刷中.
- ③ Hiroki Narita. 2014. *Endocentric Structuring of Projection-free Syntax*. John Benjamins. 印刷中.
- ④ Hiroki Narita. 2014. B. Suranyi ed. *Minimalist Approaches to Syntactic Locality*. Cambridge University Press. 印刷中.
- ⑤ C.-T. James Huang and Hiroki Narita. 2014. J. D. Wright et al. eds. *International Encyclopedia of Social and Behavioral Sciences* (2nd Edition). Elsevier. 印刷中.
- ⑥ Samuel David Epstein, Hisatsugu Kitahara, Miki Obata and T. Daniel Seely. 2014. M. den Dikken ed. *The Cambridge Handbook of Generative Syntax*. Cambridge University Press. 印刷中.
- ⑦ Naoki Fukui and Hiroki Narita. 2014. A. Carnie, D. Siddiqi and Y. Sato eds. *Routledge Handbook of Syntax*. 734 頁(3-23). Routledge.
- ⑧ ノーム・チョムスキー(著)、福井直樹・辻子美保子(訳) 2014.『統辞構造論』433 頁. 岩波書店.
- ⑨ 池内正幸・郷路拓也(編)、池内正幸・保坂道雄・藤田 耕司 他(著) 2013.『生成言

- 語研究の現在』263頁(1-9, 67-93, 95-123).  
ひつじ書房.
- ⑩ Neal Snape and Noriaki Yusa. 2013. M. Whong, K.-H. Gil and H. Marsden. eds. *Universal Grammar and the Second Language Classroom*. 252頁(161-183). Springer.
- ⑪ Koji Sugisaki and William Snyder. 2013. M. Becker, J. Grinstead and J. Rothman eds. *Generative Linguistics and Acquisition: Studies in Honor of Nina M. Hyams*. 358頁(291-308). John Benjamins.
- ⑫ Michio Hosaka. 2013. M. Hosaka, M. Ogura, H. Suzuki and A. Tani eds. *Phases of the History of English*. 384頁(197-210). Peter Lang.
- ⑬ ノーム・チョムスキー(著)、福井直樹(編訳). 2012. 『チョムスキー言語基礎論集』460頁. 岩波書店.
- ⑭ 福井直樹. 2012. 『新・自然科学としての言語学』360頁. 筑摩書房.
- ⑮ 藤田耕司・岡ノ谷一夫(編)、池内正幸・藤田耕司・遊佐典昭 他(著) 2012. 『進化言語学の構築 新しい人間科学を目指して』325頁(1-11, 15-34, 55-75, 77-94) ひつじ書房.
- ⑯ ノーム・チョムスキー(著)、福井直樹・辻子美保子(訳). 2011. 『生成文法の全て』462頁. 岩波書店.

[その他]

ホームページ  
[日本生物言語学プロジェクト]  
<http://www.bioling.jp/>

国際会議・国内会議等  
「京都生物言語学会議」主催  
2012年3月12日・京都大学

「第9回言語進化の国際会議 (EVOLANG IX)」共催  
2012年3月13-16日・キャンパスプラザ京都

日本英語学会 30周年記念大会特別ワークショップ <Current and Future Issues in Bilingualism> <Basic Operations in Syntax>企画・運営・実施  
2012年11月11日・慶應義塾大学

「生物言語学・東京ワークショップ」主催  
2013年12月15日・上智大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤田 耕司 (FUJITA, Koji)  
京都大学・大学院人間・環境学研究所・教授  
研究者番号：00173427

### (2) 研究分担者

福井 直樹 (FUKUI, Naoki)  
上智大学・外国語学部・教授  
研究者番号：60208931

辻子 美保子 (ZUSHI, Mihoko)  
神奈川大学・外国語学部・教授  
研究者番号：00264705

久野 正和 (KUNO, Masakazu)  
早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授  
研究者番号：00453621

加藤 孝臣 (KATO, Takaomi)  
上智大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：20548151

成田 広樹 (NARITA, Hiroki)  
早稲田大学・高等研究所・助教  
研究者番号：60609767

遊佐 典昭 (YUSA, Noriaki)  
宮城学院女子大学・学芸学部・教授  
研究者番号：40182670

杉崎 鉦司 (SUGISAKI, Koji)  
三重大学・人文学部・教授  
研究者番号：60362331

小野 創 (ONO, Hajime)  
近畿大学・理工学部・准教授  
研究者番号：90510561

小畑 美貴 (OBATA, Miki)  
東京理科大学・理学部・准教授  
研究者番号：80581694

池内 正幸 (IKE-UCHI, Masayuki)  
津田塾大学・学芸学部・教授  
研究者番号：20105381

上田 雅信 (UEDA, Masanobu)  
北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授  
研究者番号：30133797

保坂 道雄 (HOSAKA, Michio)  
日本大学・文理学部・教授  
研究者番号：10229164

### (3) 研究協力者[海外共同研究者]

Cedric Boeckx  
ICREA/Universitat de Barcelona・教授